

第十四章 寛容と忍耐

池田内閣の第一の使命は、安保騒動で荒んでしまった世相と人心を收拾して、これを建設的な方向に転換することであった。そのためには、総選挙で公約した所得倍增構想の政策化を急ぐ必要があったが、政府はその前に、より緊急に解決しなければならぬもう一つの問題を抱えていた。三井三池炭鉱の争議である。

石炭から石油へのエネルギー転換の進行によって、当時、石炭産業は深刻な不振に陥り、三井鉱山は六千人にのぼる人員整理を行おうとした。これに対して三池鉱業所を中心に、昭和三十四年初頭から争議が始まっていたが、岸内閣は安保騒動のため、ほとんどこれに対処することができずにいた。

一 企業の労使間の争いの域を超えて、総資本対総労働の対決とまで言われる大きな政治的、社会問題となつたこの争議をいかに解決するかが、新内閣の試金石となった。池田の命を受けた石田新労相は、中労委に對して職権幹旋に乗りだすよう要請した。労使双方の強硬な態度に、中労委の幹旋は難航をつづけたが、石田労相の、「人命尊重はすべての論議を超えた問題」というねばり強い説得が功を奏して、労使はようやく話し合いの椅子につくことになった。この間大平官房長官は、首相、労相に太田黨総評議長、原茂炭労委員長を加えた調停の会議を主宰し、また財界の理解を取りつけるなど多面的な活動をつづけた。保革の間が隔絶していた当時にあつては思い切つた措置である。

中労委の最終斡旋案は、八月十二日に会社側によって、十八日には炭労側によって受諾され、さしもの争議もここに解決を見た。新内閣成立一カ月後のことである。「新内閣の初仕事は、かくて一応の成果を収めえたのである」と大平は書いている。

こうして新聞の紙面から、安保騒動以来つづいてきた血なまぐさい事件が消えた。そこへ打ち出されたのが新政策である。大平官房長官は、所得倍増の政策をより具体的な政策とするため、大蔵省の下村治、宏池会事務局長の田村敏雄らとともに新政策体系の作成にとりかかった。問題となったのは経済の成長率であったが、池田首相は、九月一日の政府・与党会議で、「向こう三年間九%」の線を最終的に裁定して、新政策の根幹を決定した。

九月五日に発表された新政策は、総裁公選時に打ち出した六項目の政策を拡充して次の九項目にわたっている。

- 一、民主政治の擁護と行政の刷新、
- 二、平和外交の推進と安全保障体制の確立、
- 三、経済成長政策の推進と完全雇用の達成、
- 四、一千億以上の減税、
- 五、社会保障の拡充、
- 六、農林漁業基本政策の確立、
- 七、中小企業の近代化、
- 八、文教の刷新充実と科学技術の振興、
- 九、青年・婦人対策の推進。

大平はこの新政策について、のちに、次のように記した。

「……この新政策は、善きにつけ悪しきにつけ、真剣な論議に値する若干の特長をもっていたと思う。その一つは、寛容と忍耐の精神を政治運営、とりわけ国会運営の基調として持込み、人事管理体制の確立を政刷新の軸として特にとり上げたこと。その二は、内政と外交の一体化を政治運営の基本として強調したこと。その三は、向う十ヶ年にわたる所得倍增計画を経済政策運営の指針として採択したこと。さらには第四として、経済成長に伴う政府の任務を経済基盤の強化、産業構造の高度化、人的能力の開発、社会保障の拡充に指向したこと。そして道路、治山治水、港湾等の長期計画、農業基本法の策案等に見られるように、重要な政策を長期的展望の中に位置づけようという意欲を明確にしたことである」。

官房長官の仕事の中で、重要な一つは新聞記者との応接である。大平官房長官は、特定の範囲を除いてまだ多くの人には知られざる政治家で、新聞記者の中でも、池田派を担当したことがあつたもの以外は、大平をよく知らぬものが少なくなかつた。

その大平を組閣翌日の『朝日新聞』はこう紹介した。

「見るからに秀才型の多い大蔵官僚出身には珍しく、見てくれが鈍重なタイプである。一体、何を考えているのか、ちつともわからん」という人も多いが、それでいて親分池田氏の信任は厚く、池田氏の総裁立候補の声明文も書いたりしている。池田総裁が決まる前から早くも、大平官房長官確実が取りざたされていたくらいだ。それに、岸前首相や河野一郎など他の派閥の親分衆からも買われており、どこにそんな魅力が潜んでいるのかと不思議がられたりする。だから、見てくれのヌーボーは一種の政治的なポーズで、どうしてなかなか抜け目のない動き方をする。見かけにだまされて油断はできない」との評も出てくるわけだ」。

官房長官との接触が深まるにつれて、記者たちの大平に対する印象は変わっていった。当時、官邸記者クラブに所属していた記者の一人は次のように言っている。

「大平さんは、電話で送稿するのには、きわめて便利な話し方をしてくれました。ちゃんと『前書き』があつて、次に本文に入るといふようなかたちでね。それと、英語がよく出るんですよ。『明日は日曜日ですが、官房長官の予定は？』いや、明日は予定はありませんよ、ノンポリティカル・ホリデーですよ」といふ具合で、まず、大平英語で有名になつたんじゃないですか」。

官房長官の会見は、国会開会中は院内の大臣室前小部屋で、閉会中は官邸の玄関脇の小部屋で行われた。加盟各社の記者室、会見室のほか、内閣報道室、写真室、食堂等を備えた現在の官邸別館（新聞記者会館）は、池田内閣時代の昭和三十七年一月に着工され、七月に完成したものである。記者たちはこれを池田・大平の『善政』と呼んだ。

官房長官の激務をぬつて、一日実質的に六回（朝駆け、定例会見三回、夜十時半の夜まわり記者との懇談、そして茶の間組と称される親しい記者への応対）の応接が、肉体的にも精神的にも決して楽なはずはない。しかも、夜中の一時頃に記者たちが帰ると、大平はその後で、池田総理との打合せに信濃町へ出かけ、池田夫妻の寝室まで入つてその日の重要案件について相談し、帰ってきてちよつとウトウトすると、朝駆けの記者がもつ来ているといふ具合だつた。

だが大平は、持ち前の忍耐力で、全く嫌な顔を見せずに、記者たちに応対した。それは何よりも、彼が、安保騒動後の世論の動向をきわめて重視していたからにほかならないであらう。彼は、記者に正しく伝えると同時に、記者から知ることにつとめたのである。

むろん官房長官の仕事は、記者への応対だけではない。大平自身、こう書いている。

「官房長官は、多忙な職務である。内政、外交全般にわたり、絶えず目を光らせ、神経を働かせていなければならぬ。国の内外を問わず、また昼夜を分かたず、何か重要なことがあけると、政府を代表して直ちに対応しなければならぬ。また、政府各部と与党には、全幅の協力をとりつけねばならず、野党、報道界、

労働界はもとより、学界、教育界、芸能界、スポーツ界とも折り合いをよくして行かねばならない。あらゆる変化に応じられる柔軟な姿勢が必要で、硬直してはやっていけない。だから官房長官は自らが無でなければ、当意即妙な対応ができるものではない。

私はまず、自分の机の上や、引き出しの中に一切懸案をもたないように努めた。問題が起きると時をおかないで、どこに誰に処理してもらおうかを考えて、即座に始末した。そして、このように処理してもらいたいという注文はつけないで、相手が処理して得た結果には、多少の不満があっても、それを尊重するように心がけたものである。

池田首相は九月、所得倍増を中心とする「新政策」が編成されるや、全国遊説の旅に出た。言うまでもなく、解散、総選挙を目指してのことである。そうした中の十月十二日、公明選挙連盟主催の日比谷公会堂における自民・社会・民社三党首立会演説会で、社会党の浅沼委員長が凶漢の手によって刺殺された。一瞬の出来事である。

総評はただちに抗議集会を開き、連日国会にデモをかける方針を決定した。大平官房長官は、事態收拾のために直ちに山崎徹国家公安委員長に辞任してもらおうほかはないと考え、慎重な池田首相に、その夜のうちに事を決しなければならぬと説き、結局、翌日の臨時閣議で山崎公安委員長の辞任が決まった。

池田内閣初の第三十六回臨時国会が十月十七日に召集され、池田首相は十八日、浅沼追悼演説を行った。

ついで二十一日に、新政策の内容を基調とした施政方針演説がなされた。むろん大平がその草稿を執筆した。

「施政方針演説は、各省庁より出てきた資料を駆使して内閣官房長官がそのとりまとめに当たる。もちろん与党の意見を徴した上、総理が所要の改訂を施し、最終的には閣議で決める。肝心なことを細大洩すまい

とすれば贅文冗長になるし、次元の高い雄渾なものにしようとするれば、その際省いたところが後で問題になったりする。簡略に流れず冗長に墮せず、しかも一つの思想をもって貫こうとすることはむづかしい。また平易な文章を選べば不真面目だといわれ、荘重な文章にすれば中身が伴わないと非難される。どうやってみてもうまくいかないものである」。

各党の型どおりの代表質問のうち、二十四日、国会は解散された。

第二十九回衆議院議員総選挙では、テレビによる党首討論会が最大の話題となった。あたかもアメリカではケネディ対ニクソンの大統領選挙が進行中で、フ라운管上では華やかな応酬がくりひろげられており、NHKもこれにならったのである。

十一月十二日、ケネディ当選が告げられた直後、池田勇人自民党総裁、江田三郎社会党委員長代行、西尾末広民社党委員長の三人が、評論家唐島基智三の司会で討論に臨んだ。この企画が好評だったので、つづいて、第二弾として、大平正芳官房長官、成田知己社会党政審会長、曾禰益民社党書記長のテレビ討論が行われ、大平官房長官の姿を国民一般に印象づけた。

十一月二十日の選挙の結果、自由民主党は解散時の二百八十三名が二百九十六名となり、のちに無所属五名のうち四名が自由民主党に入党したので、議席は三百名の大台を超えた。社会党は、浅沼の甲い合戦ということで善戦し、二十三名増の百四十五名を獲得したが、自民党の大勝のため、勝利感を生まれなかった。民社党が四十名から十七名へと激減した。大平は、官房長官という職務上ほとんど選挙区へ帰ることができなかったが、二十二歳になっていた長男の正樹が、父にかわって立会演説を行い、画板に原稿をのせ、一枚ずつめくって読んだ。

開票の結果、大平は二位に二万二千票の大差をつけてトップ当選した。いまや彼は、郷土の輿望を担う政治家となっていた。

内閣の要をあずかる官房長官として最も苦心するものの一つは党内政策である。大平が全力をつくしたものは、第一次組閣で締め出された河野一郎が分党などという無謀な行動に走らないようにすることであった。彼は河野対策に腐心した。

この頃、大平は親しい記者に持説「橋田論」を持ち出して、「池田内閣を安定させつつ事を運ぶには、河野と佐藤という党内対立勢力を二つの焦点として、橋田全体のバランスをとることが必要だ」と述べている。

しかし、池田総裁の実現に大きく貢献した佐藤栄作にとって、池田・大平コンビの河野対策には不満があった。大平は、佐藤がいずれ池田の後を襲うのは順序でもあり、保守本流の筋でもあると考え、佐藤を尊重する気持ちを変えなかつたにもかかわらず、佐藤の方は大平に不快感を抱くようになったのである。

第二次池田内閣のすべり出しは、冒頭に議長問題でつまづくなど、三百議席もとつた直後としては、手際が悪いと批判された。池田は衆議院議長に石井光次郎を予定していたが、閣僚に石井派が一人もいないことを不満に、石井がこれを断つたのである。池田は、前議長の清瀬一郎に就任を依頼したが、野党は、清瀬が安保国会の責任者であるとして強く反対し、結局話し合いはついたものの、国会は二日半にわたる空白を招いた。この時の人事では、党では、益谷幹事長、保利総務会長が留任し、政調会長には福田赳夫が就任した。一方、閣僚には、河野派、三木派からも人が入って、よく言えば、「挙党内閣」、悪くいえば、「派閥均衡内閣」ができた。小坂外相、水田蔵相、石田芳相等が留任し、法務には植木庚子郎、厚生には古井喜実、通産には椎名悦三郎が、また建設には河野派から中村梅吉が入った。大平は官房長官に留任した。

池田内閣になってから経済企画庁が中心になって立案作成を急いでいた「国民所得倍増計画」は、昭和三十五年十一月一日に経済審議会長石川一郎の名で答申が出された。答申を受けた政府は、これをほとんどそのまま採用し、十二月二十七日に閣議決定して、昭和三十六年度予算に織り込むことにした。

大平は、所得倍増論が「計画」となることについて若干の疑念を抱いていたらしい。彼はこう語っている。「所得倍増論は、日本の置かれた状況で、日本人の知恵と労働、技術、貯蓄力をうまく利用していけば、十年間に実質所得が倍にならないはずはない、ということなんだ。」

池田内閣ができたときにそれを所得倍増計画というものにした。ほくは計画経済じゃないので、政府の計画にするのは間違いだ、政府が政策を実行する場合のひとつの鏡にしておいて、その鏡を見ると政府の施策の善し悪しがわかるじゃないかという、鏡にしようじゃないかということだった。しかし、どうしても本人（池田）が所得倍増計画を政府の計画にする、といいだしたわけですね。」

大平は、政策とは流れの上うまく事をのせて行くべきものであって、現実を無理に伸ばしたりちぢめたりするのは間違いだと考えており、所得倍増政策についても、この考え方に立つ意見を抱いていたのである。

ともあれ大平は、昭和三十六年の正月には、首相の施政方針演説を再び準備しなければならなかった。これについては彼自身が次のように記している。

「三十六年一月の再開通常国会における施政方針演説は、その後の池田政権の政策的方向を構造的に示したものであった。外交については、まず外交と内政との不離一体性を強調し、内政のあり方がわが国の国際信用を左右するものであることを指摘するとともに、いわゆる中立主義が幻想にすぎない所以を力説した。中立主義は、わが国をめぐる環境に対する具体的検討を怠り、わが国の国力が東西間の力の均衡に多大の影響をもつ事実を看過し、わが国の経済の繁栄が自由国家群との協調を第一義的な基盤とする事実に対する洞察力を欠く幻想であるとした。この中立主義幻想論は、その後国会において激しい論争の種となったものである。」

経済政策については、わが国の経済力の強い成長力に対する信頼と、その潜在的な力が歴史的な開花期を

迎えておるとの認識に立つて、いわゆる所得倍増計画という長期的展望の下に総合的施策を華々しく展開したものであった。しかしこれは国民全体の自由な創意とたくましい活動力によってはじめて可能になるものであって、池田さんがむりやりに国民に押しつけようとするものでは決してないと用心深く断っている。さらに労働の流動性と雇用の高度化をはかることが、今日の経済政策の眼目でなければならぬと主張した。事実昭和三十六年、七、八の三ヶ年間に新たに職業戦線に出発する新鮮な労働力は、実に五百万の多きに上ることが見込まれ、彼等に立派な職場が用意されなければならなかった。また一方発展の遅れ、不完全雇用の状態にあえぐ農林漁業や中小企業の近代化は、日本経済の近代化の道程において越えなければならぬ所であった。そして「いつの日か、何人かがこの問題の解決にメスを入れなければならぬ」という問題であるとして、この難問に立向う自らの使命感を表明している。このこともその後国会の内外において活発な議論をよんだものである」。

こうして比較的順調に進んできた池田政権も、昭和三十六年一月の再開国会から、六月十九日の池田渡米までの約半年間は、一種の揺れもどしを経験する時期となった。

まず、一月三十一日に、池田首相が社会党の代表質問に対して、「弱小国がいかにようとも、日本は中立主義をとらない」と「失言」し、抗議によってこれを取り消した。

二月一日には、右翼の少年が『中央公論』にのつた深沢七郎の「風流夢譚」を皇室に対する侮辱だとして、中央公論社長宅を襲い、家人二人を殺傷して、小倉警視總監が辞任した。この事件によって、筆者深沢と中央公論社を名譽毀損で告訴すべきだという意見、要請が強まり、大平の苦悩は深くなった。

「いつ、どこで、何が起るか判らない。しかしそれが何であらうとも、政府は政府の立場で、自らの意見と措置を決めなければならない。内閣官房長官は、その場合、政府の目となり耳となり、頭脳となり口とならなければならない役柄である。」

私は、この事件の收拾につきひそかに心を砕いた。事件自体の究明ももとより大切であるが、それは司直の手に委ねて然るべきだ。政府としては、冷静かつ沈着にこの事件の政治的收拾に当たらねばならないと考え、目立たぬように各方面の有識者の意見を、それとなく、聴取したのである。……首相と私は、つとに告訴権を行使しない肚をきめていた。それはこの事件を法廷の問題にすることは、皇室と国民の間柄を、冷たい法律とその論理によって律することになるからである。本件が、法廷における乾いた論争の種にされるようなことは、首相にとつても私にとつても到底忍び難いことであつたからである」。

四月一日、第三十八回通常国会で、所得倍増計画を織り込んで前年度比二四・四％増の積極予算が成立したが、その頃から、国会の雲行きがおかしくなつてきた。提出されていた法案は、防衛二法案、農業基本法案、医療二法案、厚生年金法案、ILO関係法案などであつたが、防衛二法案はどうにか衆議院を通過したものの、池田首相の公約だつた農業基本法案は難航をきわめた。

これは、日本経済の近代化が進む中で、これからの農業の進むべき新たな方向を示す、いわば「農業の憲法」とも言つべきものであつた。

祝日の四月二十九日、清瀬衆議院議長は議長職権で本会議を開会、自民・民社のみが出席し、社会党欠席のまま、農業基本法案は可決された。荒れた国会は、五月九日にようやく正常にもどつたが、その四日後の五月十三日、自民党と民社党は共同で、「政治暴力行為防止法案」を国会に提出した。これは、浅沼刺殺や嶋中央公論社長邸に対する右翼テロの襲撃のような事件を未然に防止することを目的としていたが、同時に左翼のデモを規制することもねらいとしており、社共両党はこれを「新警職法」と呼んだ。

大平、宮沢らの首相側近はこの法案の上程に反対したが、池田は、「お前たちは、わかっちゃあらん」と強気の態度でこれを推し進めた。そこには池田の本来持つていた高姿勢がうかがえた。法案の審議が進むにつ

れて国会は荒れはじめ、自民党内にも慎重論が出てきた。池田首相は強行採決を断行して、「攻防法案」は参議院に送られたが、参議院の松野鶴平議長ら参議院自民党幹部はこれに反対して、継続審議のやむなきにいたった。

六月十九日、池田首相は、それまでのトラブルを振り捨てるように、アメリカへの旅に出発した。ケネディ政権が出来たことでもあり、ここで親交を深めておくことは日本にとって是非とも必要という判断に立った訪米である。

この時、大平は池田満枝夫人に同行をすすめた。満枝夫人は、「池田が総理として最初の渡米の時に、外国語はしゃべれなくてもよいからぜひ従って行きなさい」と熱心に勧めて下さったのは、他ならぬ大平さんでございます。岸総理の奥様がお体が弱くて出かけられなかつたし、私も家で留守番をしていればよいと思っております。大平さんの強引さに負けて泣き泣き渡米に同伴をしたわけでございますが、それ以来、総理外遊の際は夫人同伴をという前例が開かれます、さすがに大平さんは創意工夫に富んだ先見の明のある政治家だったと、あとで感心した次第でございます」と書いています。

池田首相の訪米は成功だった。ケネディ大統領はポトマック川に二隻のヨットを用意して池田首相夫妻を歓迎し、会談の結果、米側が日米貿易経済ならびに日米科学技術の二つの合同委員会を定例的に開きたいと提案、日本側もこれに同意した。「日米パートナーシップ」という言葉が生まれたのもこの時である。

留守を守っていた大平官房長官はこの成果に満足したが、同時に、池田首相が例によって調子にのり、帰国時にしゃべりすぎてはと心配し、帰路立ち寄るハワイのホテルに手紙をだし、羽田についたときいい気持ちで手を振ったりしないこと、「反日感情」のいちばん強いのは日本なのだからアメリカで成果をあげたなどと思わないこと、凱旋將軍のようなふりをしてはならないことなどを、「こまこまと書いた」。

ハワイに着いた池田首相はこれを読んで、同行の宮沢喜一に、「大平が女房の取越し苦労で、つまらんことを言ってきた。池田・ケネディ会談は東京でも大変な成功だと評判らしいな」と語ったが、三十日夜帰国したときには、大平の忠告どおり、手を振らずにタラップを降りた。

訪米の成功に気をよくした池田は改造人事にとりかかり、七月十三日、自民党実力者との全体会議を開き、ついで、三日間にわたり個別に会談をつづけ、その結果、まず改選期にきている党役員を決定した。党では、大野副総裁が留任し、三役として、前尾幹事長、赤城総務会長、田中政調会長の新メンバーが布陣された。新幹事長の前尾は池田の大蔵省の後輩であり、池田と肝胆相照らす盟友関係にあった。大平とともに池田体制を支える双璧であった。このとき鈴木善幸は、病身の前尾幹事長を補佐するために筆頭副幹事長に就任した。ついで十八日、組閣に入り、河野農林、佐藤通産、藤山経済企画、川島行政管理、三木科学技術など、実力者の入閣がきまった。大平は官房長官に留任する。これで、石井派をのぞく七派閥の長が勢揃いした。

ところで、当時の官房長官は国務大臣ではなかった。国務大臣となったのは、池田内閣退陣後の佐藤内閣で、橋本登美三郎が官房長官になった時からである。大平はこの話を聞いて、「官房長官は大臣ではない方がいいんだがな」とつぶやいたという。新聞記者が「なぜですか」とたずねると、大平は答えた。

「ぼくが官房長官の時には、河野さん、佐藤さんなどの実力者が閣内にいた。実力者内閣というのは、言葉は悪いが、動物園みたいなもので、猛獣がいっぱいいる。官房長官はいわば猛獣使いで、したがって猛獣と同じ次元にはいけない。一格下の方が猛獣が怒っても、『すみません』ですむからね」。

内閣に比して党関係は軽量執行部と言われたが、池田は、盟友の前尾を幹事長に得、また内閣に実力者のほとんどを取り込み、政情不安を感じることなく、国政に集中できるようになった。

第二次池田第一次改造内閣は、東証ダウ平均が千八百二十九円と東京証券取引所開所以来の高値をつけて、

その門出を祝福したが、間もなく、経済界にはあちこちに景気過熱、危険の赤信号がつきはじめた。民間設備投資は、三十六年一〜三月期に、年間推定三兆六千六百九十二億円と、所得倍增計画で見込んでいた最終年度の水準（三兆六千億円）を早くも突破し、GNPの実質成長率は、一〇%を上回る情勢となった。一方、国際収支は、五月から赤字に転じた。強気の池田首相も、秋口に入ると景気調整策を指示し、九月末、公定歩合が引き上げられた。東証ダウは低落をつづけ、十月には千三百円を割りこんでしまった。

こうなると、党内にも不満の気配が満ちてくる。それを加速したのが、内閣の河野農相と佐藤通産相の対立である。実力者内閣は、たしかにいい意味での競争関係をつくりだし、なかでも河野農相の活躍がめざましかった。総裁選挙で池田と対立した河野が、省内の人事の刷新、闇米の自由販売、生鮮食品の価格据置きなど積極的な手を打って、池田政治の推進につとめた。池田首相も、「河野は出来るやつだ、あれは使える」と言いだすようになり、池田、佐藤関係は次第に微妙なものとなっていくた。

そういう中で、十一月二日から三日間の日程で、池田訪米の際に合意された日米貿易経済合同委員会の第一回会議が、箱根で開催された。

この会議の意義について、大平はこう記している。

「もともとこの合同委員会は、具体的な問題を交渉したり取決めたりする場ではない。双方の自由な意見の交換を通して日米間の友好の絆を強化し、両国の経済関係の緊密化に寄与しようとしたものである。従って、お互い言いたいことをいい、相互の立場に対する理解を深めておくことは、具体的な問題が生じた場合に、的確且つ迅速な判断と措置ができればよいものである。また各種の国際経済会議に臨んだ場合に、日米双方の下打合せがすでにできているので、その場において日米協力が生かされるということも期待される。さらに日米両国の経済関係が二日ないし三日間にわたって、日米間の経済問題、日米共通の関心事の討議に没頭するということは、そのこと自体、日米両国の大きい外交的演出であり、両国民はもとより、全世界に与え

る影響は決して小さいものではないといえよう」。大平は、このことを新聞記者には、「日本はアメリカについて四六時中考えていなければやって行けないが、アメリカには考えるべき国が何十とあり、一年に二日か三日でも、アメリカ側が日本のことだけを考えるとというのは、きわめて大きい意義があるんだよ」と解説した。

この日米貿易経済合同委員会の三日前の十月三十日、大平の長女芳子と森田一の間には縁談がまとまり、津島寿一夫妻の媒酌で、パレスホテルにおいて華燭の典があげられた。森田は香川県坂出市の出身で、坂出高等学校、高松高等学校を経て東京大学に入学、昭和三十二年大蔵省に入った前途有為の青年官僚であり、当時は主計局総務課勤務であった。

大平はつねづね、芳子について、「女の子は勉強なんかしなくてよい。可愛くて、早くお嫁に行けばよい」と言っていたので、この結婚が嬉しくなろうはずはなかった。

明けて昭和三十七年は、参議院議員選挙と総裁公選の年である。だが、景気は前年から不振をつづけ、同時に最も心配されていた消費者物価の上昇傾向が顕著になってきた。当然ながら、経済成長論者と安定論者の間に激しい論争が繰り広げられるようになる。藤山経済企画庁長官が、四月十三日、経済同友会総会で高度成長よりも経済全体の均衡を強調し、「低金利政策が設備投資を刺激して、危険をまねく原因をつくった」と池田経済政策に批判を加え、政財界に大きな波紋を投げかけた。

会期末の国会はゴタゴタをつづけ、ガリオア・エロア返済を行うための産業投資特別会計法案が参議院で審議未了となり、重宗雄三参議院議長会長が責任をとって辞表を提出した。また、医療関係の法案が流れたため、水田蔵相と灘尾厚相も辞表を出した。これら辞表は、慰留によっていずれも撤回されたが、池田体制の足もとをゆさぶる不気味な振動であった。

総裁公選の年には、すべてが政局に結びついて行く。藤山の動きは、佐藤を刺激した。また岸派の後継者と見られる福田赳夫もこの頃、池田体制に反発して、『党風刷新連盟』をつくった。そして、藤山、佐藤および福田の三つの動きを足場に、国会終了の直後、クーデターによる佐藤政権樹立説が流れた。

池田にとって幸いであったのは、一つは、政権発足当時には反主流派であった大野や河野が池田を強く支えたこと、もう一つは第六回参議院議員選挙が迫っていたことであつた。これが派閥抗争の深刻化を防いだ。

選挙の結果、自民党の当選者は五名増の六十九名であつた。大平は藤山が、投票後、辞表を提出したので、これを慰留しに走つた。藤山自身の回想によると、この時の状況は次のとおりである。

「……いずれ閣僚を辞任しようと思ひそかに決意していたが、問題は時期だ。河野さんのいうように選挙前にやめるのはよくない。かといつて選挙の結果がわかつてからではまずい。それで、投票日の七月一日、投票の締め切り時間が過ぎた夜七時半ごろ、家にいた大平官房長官に『今から、できれば官邸で会いたい』と電話した。突然だったので大平君は『車も返してしまつたし、今日はカンニンしてくれ。明日でもいいじゃないか』と渋つた。しかし、とにかくこの夜のこの時期しか機会はない。どうしても会つてほしい』とがんばつて官房長官を訪ねていき、『経済政策の意見の違いもある。辞めさせてもらいたい』といつて辞表を出した。こうして藤山は七月六日、辞任した。

昭和三十七年七月十四日が総裁公選の日である。佐藤と藤山の去就が注目されたが、結局、佐藤は池田との友情を選択する方に踏み切り、また藤山も大野らの強い説得によつて、立候補を断念した。公選では、池田が三百九十一票を取つたが、白票その他合わせて七十五票の池田批判票が出た。

池田は、組閣の構想を練るため、箱根にこもつたが、何もまとまらずにもどつてきた。箱根から帰つて以後の様子については、田中角栄が記している。

「……池田内閣の改造の前夜、前尾繁三郎幹事長、赤城宗徳総務会長、それに政務調査会長であった私と官房長官の大平君の四人が信濃町の池田邸に呼ばれた（赤城総務会長は防衛庁の病院に入院中で欠席）。」明日の組閣に当たってまず党幹事長、外務大臣と大蔵大臣を三人の中で決めてみなさい」と池田さんに冒頭、言われた。池田総理が大蔵省出身であるから大蔵中心色の人事は避けて、私が大蔵大臣に、党の要の幹事長は前尾留任が至当、外務は大平と自然な形で決まった。組閣の骨が決まると組閣名簿はスラスラとできあがったのであるが、翌日になって大風が吹いた。

党の副総裁と三役を組閣参謀として総理官邸で会議が始まってすぐ総理から「この案で決定したい」と名簿が示されたところ、大野伴睦副総裁から一喝が飛んだ。「この案は田中、大平連合内閣ではないか」。

私と大平君の二人は黙って席を立って官房長官室に入り、内から鍵をかけて椅子を並べて寝てしまったのである。私はちよつとムカムカしていたが、そのうち大平君は軽いいびきをかき始めていたのである。繊細で緻密な大平君にこんな凶太い神経があつたのかと、私は驚くとともに微笑んだのである。一時間程したら、扉が叩かれたので総理大臣室に入っていったら、大野さんはニヤニヤ笑つていた。原案のどこかに大野副総裁が手を入れたのだと思ひながら、黙って池田総理から渡された確定組閣名簿を見たら、前尾幹事長、大平外務大臣と田中大蔵大臣はそのままであつた。大平君がその時、どんな顔をしていたかは今でも思い出せない。

党は、大野副総裁、前尾幹事長、赤城総務会長がそのまま、政調会長は賀屋興宣。内閣は、通産に福田一、労働に大橋武夫、建設に河野一郎が配され、大平に代わる内閣官房長官は黒金泰美であつた。

組閣は三十七年七月十八日であつた。